

井野瀬久美恵・北川勝彦編著

## 『アフリカと帝国——コロニアリズム研究の新思考にむけて——』

晃洋書房 2011年 vi+295+27ページ

佐藤 千鶴子

アフリカは今日でも世界の貧困層が多く住み、飢饉や紛争などの災害が頻発する大陸として論じられることがよくあるが、こういった不幸の原因を植民地時代まで掘り下げ、アフリカにおける植民地主義の意味を改めて問い直そうとしたのが本書である。アフリカに植民地主義が存在した時代は世界的には帝国主義の時代であり、本書の筆者はイギリス議会文書（BPP）という帝国側の記録を共通の史料として用いている。BPPはイギリス「議会とその業務に関して公式に出版されたありとあらゆるもの」（14ページ）を収めた膨大な一次史料であり、日本人研究者にとって幸運なことに1セットが1998年に国立民族学博物館に寄贈され、現在は京都大学に所蔵されている。だが、本書は帝国の見解を無批判になぞるものではなく、BPPに収められたアフリカ人の証言に加えて、現地で発行された新聞やフィールドワークで収集した人びとの記憶の語りなどのアフリカ側の史料にも依拠しており、現地の視点や経験を叙述することに重点が置かれている。本書は、植民地主義という厳格で搾取的な構造のなかであって、その時代に生きたさまざまな人びとの行為や思索の交差、相互作用こそが歴史を構成するものであるということを強く意識して書かれている。序章以下、3部12章からなる本書の内容についてまず簡単に紹介する。

第1部『『分割』と『支配』の後遺症——帝国の語りと記述を超えて——』の4つの章は、2004年に行われた2つの国際シンポジウムでの報告を基にした論考であり、アフリカ史研究とジンバブウェ史研究の回顧、イギリスと日本における戦後の「帝国」意識といった比較的大きなテーマを扱っている。

第1章「アフリカ史におけるコロニアリズム研究の再中心化——記述と枠組みの新機軸にむけて——」（ポール・ティヤンベ・ゼレザ）では、植民地時代の捉え方をめぐるアフリカ史研究の4つのパラダイム——帝国主義、ナショナリスト、ラディカル派、ポストコロニアル理論——が検討されている。独立後、ナショナリストの歴史家が植民地主義をアフリカ史のなかのひとつの挿話として相対化したのに対し、近年のポストコロニアル理論の登場によって、コロニアリズム研究が改めてアフリカ史研究の中心的な舞台に躍り出たことが論じられている。

第2章「ジンバブウェ史研究の黄金期とその衰退——1967年から現在まで——」（ヌグワビ・ムルンゲ・ベベ）では、アフリカ人の抵抗やローデシアにおける資本主義発展の特質をめぐって、イギリス人研究者とジンバブウェ人研究者を中心にアフリカニスト／ナショナリスト派、修正派、急進派（マルクス主義派）の間で活発な論争が繰り広げられたジンバブウェ史研究の黄金期——1970年代から80年代——の議論が紹介された後、2000年以降同国における歴史研究が衰退した理由が考察されている。もっとも憂うべきは専門家による歴史研究の衰退ではなく、黄金期にすらその歴史が一般の国民に共有されることがなかったこととする自戒を込めた指摘を通じて、歴史家の仕事とは何かを問う内容となっている。

第3章「帝国の遺産——イギリスに対する帝国の余波——」（アンドリュー・トムソン）は、第2次世界大戦後のイギリス人の大英帝国観について、帝国の遺産に関する博物館展示を検討することなどにより論じている。1997年の香港返還に対する無関心に示されるように植民地に対するイギリス人の意識が薄れていくなかで、国内では帝国であった過去が移民の存在によって消え去るどころか、むしろ繰り返し思い出させられている。筆者は、博物館の展示をイギリス社会に対する移民の貢献を示すものとして評価する一方で、大衆やメディアの反応をみる限り、「誇りや恥、怒りや罪といった感情にくるまれている」（86ページ）帝国の意義を考えることが一般の人びとにとってはいまだに困難であると指摘している。

第4章『『他者』への想像力——大日本帝国の遺産相続人として——』（成田龍一）は、戦後の大日

本帝国をめぐる語りについて、文学作品の内容や話者の位置を分析することで論じている。筆者は戦後の日本では植民地への関心が非常に低く、帝国の崩壊については被害の意識が先行し、戦後の日本人には「他者」への想像力が欠けていることを問題として指摘する。1990年前後からポストコロニアリズムの議論を受けて文学研究を中心に帝国と植民地を対にして考察する思考が出現してきたが、安易な「認識」によっては関係の非対称性が固定されてしまうため簡単にはいかないことを喚起している。

第Ⅱ部「植民地『分割』の解剖——境界確定のポリティカル・エコノミー——」の3つの章は、アフリカ諸国の境界線画定をめぐる問題を扱っている。

第5章「英領ガンビアの対仏割譲交渉とその社会経済史的背景」（正木響）では、セネガルの領土に細長い棒を突き刺したような形で、三方をセネガルに囲まれて存在しているガンビアの国境線がどのようにして、誰によって画定されたのかが論じられている。他の植民地と比べて関心の低かったガンビアをフランスに割譲しなかった主たる理由として、筆者はイギリス商業界からの反対を指摘し、経済動機によって決められた境界線が独立後も頑なに維持されていることを「帝国主義の真髄」として皮肉っている。

第6章「トーゴをめぐる植民地境界画定と政治的アイデンティティ形成」（岩田拓夫）は境界線が政治的アイデンティティの形成に与えた影響について論じている。ドイツの敗戦後、英仏によってトーゴが分割支配されたことで生活圏を二分されたエヴェ人の連帯意識が強まった。しかしエヴェ統一運動は北部の非エヴェ人に対する差別と排除を生み出すことになる。独立運動の過程で強化された南北対立は、独立後クーデタによる北部出身者の権力奪取をもたらすことになり長期独裁体制の構築に繋がった。独裁体制下で歴史の捏造と消去が行われ、若い世代が歴史を知らなくなっていることも問題として指摘されている。

第7章「境界線確定とイギリス帝国内の確執——利用されるレソトの声——」（西浦昭雄）は、南アフリカ連邦結成以前の時期において、四方を南アフリカに囲まれて存在するレソトの国境線画定に関して、ソト人集団を率いたモシエシェ王、イギリス本国政府、英領ケープ植民地、英領ナタール植民地、

アフリカーナーのオレンジ自由国それぞれの思惑がどのように作用していたのかを論じている。ケープ植民地総督が発揮したイニシアティブ、帝国内部でみられた意見の食い違い、本国政府も植民地政府も主張の根拠としてソト人の「声」を利用し「代弁者」として振る舞おうとしたことなどが明らかにされている。

第Ⅲ部「植民地『支配』の構造とエージェント——エリートから底辺まで——」では、エリートから底辺に位置する人びとに至るまでのさまざまなアクター（エージェント）が植民地支配をどう理解し、そのなかでどのように振る舞おうとしたのかが論じられている。

第8章「藪の中——語られるシエラレオネ小屋税戦争のリアリティへ——」（落合雄彦）は、芥川龍之介の小説『藪の中』をモチーフとして用いつつ、イギリス保護領シエラレオネにおいて1898年の小屋税導入を契機として起こった全国的な騒乱・反乱（＝小屋税戦争）の原因と経過をめぐる当時の人びとの多様な認識や見解を、同戦争の原因究明と対応策検討のためにイギリス本国政府が派遣した委員会の報告書に取められた多様な証言をもとに描き出している。その作業を通じて、地域ごとに違った形でさまざまなアクターによって行使された「複数形の暴力」があり、暴力の原因もひとつではなかったことが浮き彫りにされる。

第9章「帝国による『保護』をめぐる現地エリートの両義性——初期植民地期イギリス領ゴールドコーストの事例から——」（溝辺泰雄）は、独立運動を率いた現地エリートが植民地期の初期において帝国の存在を肯定的に捉えていたのはなぜかという問いをめぐる、イギリスが現地エリートに与えた「保護」の内容とその変質という観点から論じている。植民地期の初期にはイギリス人商人と現地エリートの利害が一致していたため、現地エリートは「保護」を求めた。しかしながら、19世紀末に植民地統治が本格化し現地の土地に対する管理権を行使するための法案が提出される。現地の人びとが考える「保護」の内容とは根本的に異なる考え方に基づく同法案を契機として反政府運動が発展していくことになる。

第10章「20世紀初頭タンガニーカのトリロジー——大英帝国、伝道会、そして植民地の人びと——」

(小泉真理)では、第1次世界大戦後のタンガニカにおいて現地人の教育や労働力調達に関して大英帝国と伝道会がどのように考えていたのか、そしてこういった外部アクターの行為を現地の人びとはどのように捉えていたのかについて、3者間の眼差しや思惑の交差と隔たりを描いている。植民地政策と宣教戦略が現地人教育を重視する点で協調関係にあったこと、ローカルな紛争や政治、権力構造の影響を受けて現地の人びとがしたたかに振る舞い、伝道会や植民地政府と親和的關係を築いたり距離を置いたりしていたことが明らかにされている。

第11章「20世紀初頭西南アフリカにおける2つの植民地主義——『ブルーブック論争』から——」(永原陽子)は、ヘレロ人やナマ人の蜂起に対するドイツ植民地政府による暴力的な鎮圧について多数のアフリカ人住民の証言を用いて詳述した報告書をめぐり、イギリスとドイツの間で繰り広げられた論争をひもときながら、「紛れもなく剥き出しの暴力による植民地統治の姿」(263ページ)を浮かび上がらせる。その上で、ドイツによる原住民虐待を批判し、原住民の「保護」を主張した南アフリカのイギリス人支配者たちが、20世紀初頭において金鉱山開発を中心とする地域経済全体を視野においた労働力調達のために間接統治支配を確立するようになった経緯について論じている。

第12章「南部アフリカにおける支配の重層構造——ポルトガル領モザンビークにおける南アフリカ金鉱業の労働力調達——」(網中昭世)は、ポルトガル領モザンビークから南アフリカへの移民労働に着目している。ヨーロッパにおける小国としてのポルトガルの財政規模の脆弱さがモザンビークの大部分の土地の植民地統治において外国資本(特許会社)の導入をもたらしたこと、さらにはポルトガルの直轄地域では非常に劣悪な強制労働が導入され、それが隣接する南アフリカのラント金鉱地帯へのモザンビーク人移民労働者の送り出しの重要な背景となっていたことが論じられている。

以上のように本書には各国の歴史研究における重要なテーマを扱ったいずれも読み応えのある12の論文が収められているが、その第1の意義は本書がBPPという重要な史料を用いて日本語で書かれた本格的なアフリカ史の研究書であるという点にある。第I部のアフリカ史に関する2つの論考がアフリカ

史研究の大きな流れを提示し、第II部と第III部では国境線画定をめぐる外交的な攻防やアイデンティティの形成、植民地期の大規模反乱、現地エリートの対応など各章が扱うテーマは絞られているが多岐にわたっており、本書には一国の通史を扱った図書や入門書とは異なる歴史研究の面白みがある。

本書の第2の意義として、「帝国」という横の時間軸を意識し、BPPという共通の史料を用いて書かれた論考から、イギリス帝国による植民地政策の特質が浮き彫りにされていることが挙げられる。20世紀初頭のイギリス帝国によるアフリカの植民地政策をめぐって複数の章で共通して叙述されているのは、イギリスが各植民地に対して経済的、財政的自立を求めようになり保護領を直轄植民地化したり、税金を導入したりしたこと、それが現地社会に及ぼしたインパクトである。シエラレオネにおける小屋税戦争のように現地の抵抗の足跡がくっきりと残されているところもあれば、ゴールドコーストでは両義的だった現地エリートがナショナリズムへと駆り立てられることになった。各章は個別の論考として興味深い内容を扱っているのみならず、1冊の本全体として読むことで、アフリカ諸国からみた支配者＝イギリス帝国の姿を比較検討することができるようになっている。アフリカの歴史的経験を「帝国」の枠組みで語るということは、つまるところ「帝国」の歴史を語っているということにもなるのである。

関連して第3に、20世紀初頭におけるヨーロッパ諸国間のライバル関係や宗主国間の位置付けを浮き彫りにしている点が挙げられる。第1次世界大戦でドイツが敗北したことでイギリスが植民地統治を引き継いだ植民地(タンガニカ、ナミビア)では、イギリスがドイツによる統治の暴力性を強調し、自らの統治をそれと対比させようとしていたことが明らかにされている。

第4に、本書において「帝国」はグローバル化した今日の世界のアナロジーとしても設定されており、過去と現在を繋ぐ縦の時間軸を意識して叙述することで、多くの論考が20世紀初頭というある歴史的時間におけるアフリカ諸国の経験を叙述しつつも、それが今日まで続く紛争や地域間対立、労働移動などの起源となっていることを明らかにしている。ガンビアの国境線、トーゴの南北対立、モザン

ピークの移民労働などの今日でも重要な問題の起源は植民地期に求められる。

アフリカ史とイギリス帝国史の研究者双方にとって有益な研究書であるからこそ、第2章に関して2点、誤訳と思われる箇所があったので指摘しておきたい。ひとつめは日本のジンバブウェ史研究の第一人者であった吉國恒雄氏の研究に関して、「1950年代になるまで、すなわちジンバブウェのアフリカ人たちが小農民となる選択ができるようになるまでは、労働者の大多数がジンバブウェ以外の地方から来た出稼ぎ労働者であったことを見出した」(67ページ-傍点評者)とあるが、これは「小農民となる選択ができるうちは」の間違いではないだろうか。南アフリカやジンバブウェにおける原住民のプロレタリア化テーゼを下敷きにした議論であると思われるが、そこで論じられていたのは小農民生産が豊かなうちは小農民は労働者になる必要がなく、入植者による土地の収奪や居留地での人口増加などにより小農民生産が危機に瀕して初めて労働者となるよう駆り立てられたということである。ジンバブウェでは小農民生産が豊かだった1950年代までの時期には都市の労働者はジンバブウェの国外から来ていたとい

うことを発見したのが吉國氏の功績のひとつであった。2つめは独立後の内戦をめぐる一文について「韓国で軍事訓練を受けたグクラフンディ」(71ページ)とあるが、これは「北朝鮮」の間違いである。原文ではKoreaとなっていた可能性があるが、翻訳する際には事実関係を確認すべきだっただろう。

とはいえ誤訳の問題は本格的なアフリカ史、アフリカからみた帝国史の研究書としての本書の価値を減ずるものではない。本書を通じて評者は歴史研究における共同研究と論争の重要性に改めて気づかされた。第I部に収められたアフリカ史研究に関する2つの論考はアフリカ史研究とジンバブウェ史研究が歴史の解釈をめぐる大論争を通じて発展してきたことを明らかにしている。論争をするためには、共通の問題意識をもった研究者が異なる事例を詳細に調べて成果を発表していくことが第1歩となる。そこから歴史を理解するための共通のモチーフが生まれる。だからこそ本書のようなアフリカ史の共同研究の成果は非常に重要であり、今後も同様の研究プロジェクトが実行されていかなければならないと思う。

(アジア経済研究所地域研究センター)